

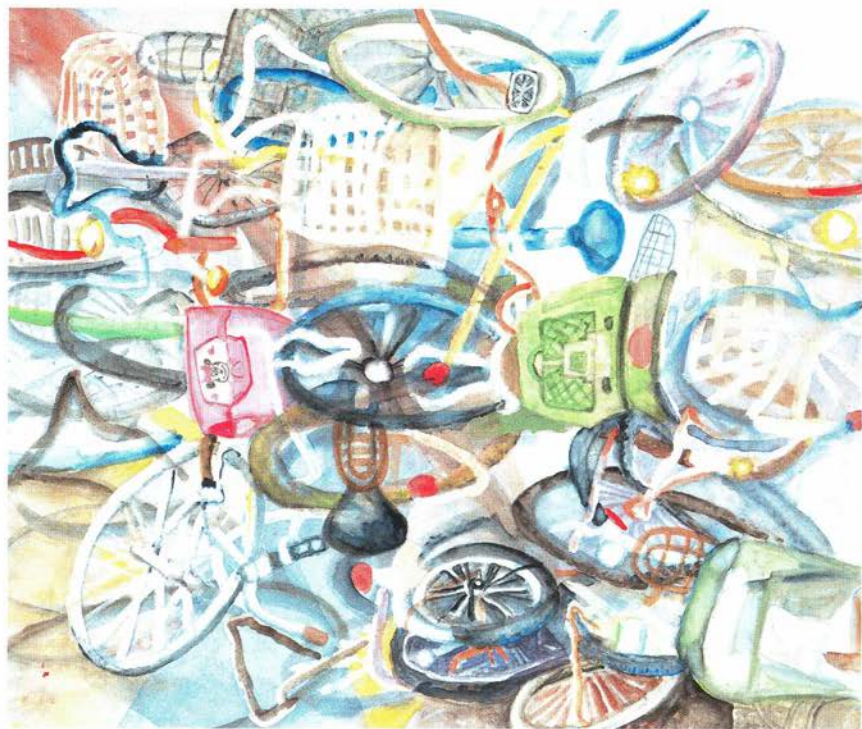
村野次郎創刊

# 香 蘭

二〇二〇年(令和二年)十月一日発行(毎月一回一日発行)

香 蘭

第九十七卷第十号



2020年(令和2年)10月号

第 97 卷

第 10 号

通卷 1078 号



# 香 蘭

2020年(令和2年)10月号  
第97巻 第10号 通巻1078号

## 目 次

村野次郎作品「私の愛誦歌(62)」	谷本朝江	表二
近詠十五首「留学」	牧野道子	2
作品一		4
二		5
三		25

### 推薦香蘭集

香蘭集	石井・伊藤(康)・大井田・桑原・鈴木(桂)	41
-----	-----------------------	----

作品一特選(八月号)	坪・水本・横山・森田・満木	18
作品二、三特選(八月号)	青山・白井・岡野・杉山(伊)・中井・中村(か)	18

村野次郎への旅(127)	牧田・三澤・脇谷・安達・河野・田中・田村	20
--------------	----------------------	----

歌の生まれる場所(93)	千々和久幸	22
七首抄(八月号)	清水すえ子	24
エッセイ・自由研究「口語自由律短歌に魅せられて」	村上・脇谷・滝山・手島	32
焦点(八月号)「コロナのとなり」	長野道子	50
谷本朝江「八十八歳」評(八月号近詠十五首)	千々和久幸	52
作品一	田中あさひ	55
作品二	川原優子	56
作品三	相川公子	58
香蘭集	中井房江	60
	白中紀代子	62
	田中あさひ	64
	内藤・布施	66
	河野村山・能城	71
	丸山慎二	72
	桜井京子	73
	歌集管見 高木佳子歌集『玄牝』評	74
	他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向	77
	歌会及び会合・他	77
	編集後記・新宿日記	80
	表紙絵	表三
	中村 陽子「重なり合って」	表三
	目次・緑地帯カット	表三
	和雄	表三

文法あれこれ(17)

緑地帯

他誌拝見 116

歌書管見 大下一真著『鎌倉 花和尚独語』評

歌集管見 高木佳子歌集『玄牝』評

他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向

歌会及び会合・他

編集後記・新宿日記

表紙絵

目次・緑地帯カット

和雄

村野次郎作品 私の愛誦歌（62）

老人の日われにも金一封賜ふとか

かたじけなくしてまたいまいまし

『明宝』

温厚で自制心の強いお人柄であったとお聞きする村野先生の作品の中で、思わず「ふふっ」と笑いを覚える一首である。

「平易平明」「平仮名短歌」を作歌信条とされながら、あけすけな歌は好まれなかつた先生にして、「かたじけなくもいまいまし」と反骨精神を垣間見ることができると。

金一封頂戴する有難さと「老人」という現実寂しい思いも一瞬よぎつたのであろう。ご自分自身と、賜わる側に向けての「いまいまし」ではなからうかと思える。

また、「足曳けど気力は老いず手に持つは杖にはあらずステッキと言う」の昭和四十七年作の一首もあり、お目にかかる事のなかつたお姿を偲ぶことしきりである。

胸を張つて老いに立ち向かう心意気を、「老いてなおかくありたし」と人生訓として愛誦歌にあげて鑑賞しています。

（『明宝』374首、『村野次郎三百首』66頁に所収）

## 四 選 者 の 作 品

不 発 弾

平塚 千々和 久 幸

昼も夜もききもわたしも眠い日を重ね一夏を遠く隔たる  
不発弾横抱きにして荒野ゆくおまえもつらき夢に喘ぐか  
豌豆の葉にくる蝶を見ておりぬあいつも死んだか俺を残して  
ルピナスの写メール届く霧雨の今朝はいずこに向けて発てるや  
約束の無きまま駅まで歩み来て傘をたためり振り向かざりき  
うなだれてカンナの花の咲き残るもう待つことはせぬと決めたる  
頻出する概念規定が読み切れずマルクス・ガブリエルにわが難渋す  
一点を見据えて笑っている写真脈絡もなく思い出でつも

妹 よ

横 浜 渡 辺 礼比子

うつらうつら遠き汽笛を聞きいたり今日がはじまるまでのしばらく  
ひたすらに励みし日々よバス停のアガパンサスの花も過ぎたり  
氣の抜けたヒールのごとし幾たびも書く仕儀となる「申し訳ありません」  
「申し訳ありません」とぞ書きてわが楽になるたび君が傷つく  
いまはまだ詳しいことはいえぬという妹よ今日はシェリーにしよう  
とうもろこし剥きいる夫はしばしばもわれの話が聞こえぬふりす

黄熟し割れたるありと人の言うゴーヤカーテン表より見て  
色褪せしタオル取り換え取り換えてともに歩めり四十余年を  
もう一度 鎌倉 香山 静子

コーヒーに入れしミルクの美しき渦をしばらく眺めてゐたり  
葉隠れに小さな柿の実見えてゐる梅雨の晴れ間の庭の片隅  
もう終りと諦めたるがある朝芙蓉一輪ふんはり咲けり  
草むらよりひよいと出で来し三毛猫が甘きひと声残してゆけり  
ほつとんとコーヒーの缶落ちてきた自動販売機はいたく忠実  
苦吟する夕べを優しく聞こえる午後五時知らせる「夕焼け小焼け」  
コロナ禍に籠り居つづくこの日々にせめては読まんあの本この本  
もう一度鷗外の『雁』を読んでみようかの青年に会ひたくなつて  
クロウタドリ 我孫子 丸山 三枝子

千枚田に植えしと言えば海鳴りを聞きつつ育ちゆかん早苗よ  
なつくさのふかくさむらに昼顔は咲いているなり夏がきたから  
メールにて遠き死をきく夜の更けを陶然として驟雨きたりぬ  
朴の葉がとびつくように降りきたり思いて吐かぬ言葉もあるに  
さざなみを生むこともなし水槽にネオンテトラは泳ぎつづけて  
帰り来て手洗いうがい今日もする習慣として気休めとして  
五指ひらき洗いに洗う手はいつかふやけるだろうふやけてもよし  
甘やかな孤独もあるかぬばたまのクロウタドリの声の聞こゆる



# 作品一特選



(八月号作品から)

香山静子 選

## 花の咲く季しき

習志野 石井雅子

夫逝きて筆舌に尽くせぬさみしさと元氣印の近藤光子さんにこやかな勸誘員のやうに無遠慮にわが家に來たる死といふものは冬の日はうすら寒くて寂しいと思つてあたら春もさびしいほろほろと零れる白い花うけて泣いてゐるのか森の小径はどうしてると問はるるスマホの画面には良き母の顔してみせるなりツイッター見てゐるだけで発信をすることのない わたし空つぽ・こ主人をじくして迎えた春のさびしさが滲み出ている。

## 白線

東京 伊藤康子

いろいろとお世話になつてありがとう送別会をコロナが流すコロナにて失業の人に混み合えるハローワークは二時間待ちらしくつきりと眉引くのみで出勤すマスクは手抜きも覆い隠してオフィスでの長寿番付十番目勞られおり若手社員に肩を組み「紺碧の空」は歌えない 神宮球場はるかななるかな

悲しみは薄まらないけど花は咲き新緑の下根の太くなる

・現時点の社会を冷静な視点から詠っている。

## 公園

川崎 大井田啓子

リニューアルすると鎖しある公園を親子連れが眺めてをりぬ十ほどのカラーコーンに囲まれて櫛大樹が楽しさうなり工事する場所を囲みてカラーコーン公園の中の主役のやうに自転車朝はやく来る作業員今日もひとりでストレッチする早々に切り倒されていづこかへ運び去られし櫛もありて伐られたる櫛のしたのテーブルで話し合ひたる日あり 鮮やか・過度の抒情を廃した爽やかな作品。

## 開放

東京 桑原祐子

春の日のうらうら川辺あの鴨も苦しからんかウイルスの中コロナ以前はいい街だったとおしなべて世界で語られんコロナ以後はマスクしてサングラスして帽子被り誰かわからぬこのままでよしオンライン飲み会などと娘は言うが酒は静かにひとり飲むべしひもすがらステイホームを半七と江戸の異世界彷徨いおりぬ言葉まだ持てぬ幼子全身を開放しつつわれに真向う

・常識に捉われず自在に詠んでいる。

## 五月

西宮 鈴木桂子

鶯のこゑ低く払暁の空ゆくを物を書く手を止めてながむる豊かなる水を湛える街川のとりに立ちて日暮れ安らく労働に疲れて眠るねむりから覚めて差し込む光は五月

ホンネらし生きる自信を失くしたと言ふ下の子をどうしたものか  
路をゆく少年らの声かがやけり自肅宣言あけて真昼を

とりどりのマスク行き交ふ二ヶ月の外出自肅とかれし街に

・自然や物を見る目が新鮮である

・ 獣のように

東 京 坪 裕

どっしりと大地に根を張り高々と新緑耀う樺大樹は

一羽きて二羽来てつぎつぎ集いきて樺若葉に雀がいつぱい

新緑の樺に楽しく集いきて今日から始まる雀の学校

新緑の耀う朝の窓により獣のようにミルク飲みおり

屋根瓦の下に雀の巢のありて卵が三個輝いていた

そう言えばコロナウイルス小鳥等に関係ないのだ夢中で遊ぶ

・雀の様子を観察する作者の目が温かい

花 マ ス ク

倉 敷 水 本 美恵子

娘と従妹お隣からも手作りのマスクが届くとりどりの色

新しい団地に申し訳のやうな公園があり桜木一本

代表が湘南新宿ラインにて行く香蘭はやがて百年

雨あがりの庭の木洩れ日浴びながら草ぬく二時間ただに沈黙

葬送は家族四人で終へしとふ生者のための儀式ならねば

スーパ―にマスク忘れて入りたり痛み眼差し全身に受く

・日常に於いて大切なものはマスクになったことを詠んでいる

学 制 に ま で

宇 都 宮 横 山 慎 夫

五十ばかり深紅の牡丹が庭先に唯一心を和ませくるる

手のひらに収まるほどのわが庭のいかりそうの花の白が零れる

短歌など作って生きて何になるならぬが短歌があつてよかつた

男子行員お茶を運んで出し呉れしが零したお茶が茶托に滲む

預金しても頭を下げない銀行は国がそういう仕組みにしたから

学校は足止め会社はどこもテレワーク主婦のみ忙し<sup>せわ</sup>しコロナのために

・物事を理性的に見る醒めた目がある

コ ロ ナ 禍

福 岡 森 田 徹

来る者は拒まぬ生き方続け来てコロナウイルスを怖れ籠れり

コロナ禍の夜にも朝はやつて来る信じていても今はまだ夜

酒の字が躍っているよカレンダーにコロナウイルスの制限解かる

この後に来るとう激しき世の変化分からぬ判らぬ解らぬコロナ

運命に逆らい生き来て八十六年酒のはしごと今も切れ得ず

豊かさ<sup>と</sup>貧しさのちようと中間にさばさば生きて悔いは非ざり

・コロナ禍にいくばくの戸惑いを見せる作者

酸 素 が 薄 い

川 越 満 木 好 美

隣とのフェンスの間より越境しむこう見て咲くジャーマンアイリス

これからは旅行三昧の筈だった二年目にしてコロナに阻まる

復興税終わらぬうちに来年はコロナ税なるが重なりくるか

中国とWHOを追及するトランプ応援今回だけは

何となく酸素が薄い気に過ごす行くところない夫が家にいて

マスクつけ対面をさけ座りおり昼の車両に小さくなりて

・社会を冷静に見ると同時に受け入れれる幅もある

# 作品二、三特選



(八月号作品から)

渡辺 礼比子 選

## 〈作品二〉

五月 米子 青山 侑市

さてもさても巢ごもり無縁の野良仕事詩のころはひとまつ措いて  
夏豆の風に騒立つ畑中に誰が忘れしか夏帽子見ゆ

コロナ禍の街を遠くに釣り日記アイナメ一尾きすごは四匹  
砂浜の木造船は唼れゆき舟底いつばい浜大根咲く

・コロナ騒ぎと距離を置き、晴耕雨読の仙境に遊ぶ。

峡の風音 長野 白井 紀代子

しめやかに桜前線北上す傷だらけなる日本列島  
花という花のいのちの咲き誇る春あかるくて春さびしいよ  
やわらかくやさしく甘き春キャベツほぐし心もほぐされて食む  
音がみなしずかに溶けてる峡の朝やさしい言葉のような風音  
言い張った者が勝つのか負けるのかどうでもいいよと厚き雨雲

・軽やかな調べに陰影のある情感を絡ませて味わい深い。

不要不急 尾道 岡野 甫江

「口ふさげ」「生活変へる」と高唱す緊急事態宣言戦時のごとし  
ステイホームなどと洒落てはみたものの何を隠さう塾居のごとし  
慎みの家居つづけばそれなりに断捨離などに手を染めにけり  
山藤は盛りの色に咲きこぼれ鳥の古道にコロナ忘るる  
不要不急あらざる暮しこんなにも詰ぬ日々を生きる二月

・コロナ禍に翻弄される日常をシニカルかつユーモラスに描く。

若 緑 横浜 杉山 伊都子

ステイホーム少しゆるみし散歩道うさぎのマスクしましまマスク  
ウィルスすすべり落とさむすべらかさ白玉椿若緑のなか  
路地裏にひとりなわとびの男の子青嵐ゆきてマスクとり出す  
コロナコロナテレビのニュース見てばかり思へば何もしなかつた春  
・現状を濃やかな視線で受け止める。内省的な四首目も印象深い。

何処へも行かず 宇治 中井 房江

見上げては探すものあり紫の桐の花房、白の泰山木  
太つちよで派手なうろこの鯉のほり翻りつつ何処へも行かず  
アルコール消毒液とハンドソープ花に添えられ届く母の日  
閑古鳥なるかは知らね轉りの増えているなり公園に来て  
・骨格のしっかりした歌。大らかな調べが心地よい。

逃げ水 福岡 中村 かよ子

肩先に降る熱き陽は夏のものもはや懐かし二〇二〇年



十万人の死者とうアメリカ コロナ禍を呑み込んで行くそれもアメリカ  
たんぼほの生れしばかりの綿帽子犬の尻尾がふれてしまいいぬ  
牛はみなどこへ行つたか街中の小さな牛舎が消えてしまえり  
・現実をミステリアスな世界に仕立て読者の想像力を刺激する。

振りむく街

藤 沢 牧 田 明 子

あの雨が冬の終りの雨だつた振りむく街に人影あらず  
人間の汚し尽くしたる球体を見つめる望月南天にあり  
スクワットせよと言はれて老いてゆく日々もやもやと砂塵に巻かる  
・一首目はドラマ仕立て、二首目は文明批判、三首目は自己省察。

魔法のことば

横 浜 三 澤 幸 子

「大丈夫うちの先生上手です」魔法のことばにかかつてみよう  
やさしさもどこかずれたる夫にはいつも勝てない丸ごと許す  
かけられる言葉いつしか「気をつけて」「あわてないで」に変わりおりたり  
友詠みし記憶に残る地名から旅番組にひきこまれゆく  
・視点の置き方、程好い距離のとり方が諧謔の味わいを生んだ。

国旗はためく

我孫子 脇 谷 房 子

無観客で春場所むかえし力士らよ朝夕あしたべに検温をして  
力士らはしかとのり切る無観客外出禁止の十五日間  
無観客の席を映して拍子木を打つ黄の色の衣装明るし  
・堪忍を強いられる相撲界を見守る視線が温かい。

〈作品三〉

コロナマスク 島 根 安 達 恵 子

コロナにて町の建物借りられず隣の県で葬式をする  
三密を避けてと届く封書持ち長生さ体操久しぶりなり  
秀長が秀吉と食べし菓子いまは宅急便で届く世となる  
・身辺の些事の切り取りがそのまま時事詠になつてゐる。

風の原つば

鎌 倉 河 野 慎 二

駆けてゐるただそれだけでいいやうな犬とわたしと風の原つば  
揺り椅子の色は青です 五月です 膝の上には猫が寝てます  
身動きのかくも無様にそして日の破片となりぬ空の雲雀は  
・詩的フレイズが一首に彩りを与えている。独自の文体を期待。

春 愁

取 手 田 中 あさひ

走りつつ考へなさいと君の言ひてんでん手毬はわが手に勢む  
いかにして払ひおとさむ春愁はるなつめほんつとワインの栓を抜きつつ  
荒天は初夜はつやにしりぞき風かをる引越し日和をいただきにけり  
若草の萌えたつ利根川べりめざし引越しトラック脇目もふらず  
・豊かな語彙と洗練された文語脈が歌の世界を広げている。

自 肅 の 朝

東 京 田 村 久 美

窓越しの春に気付きてわが細胞じくじくとせり自肅の朝に  
幾重にも続く鳥居の奥ふかく差しこむ夕日の色あたたかし  
老木の幹より細き小枝こえだ生れ桜の咲けり命を継ぎて

・一首目のオノマトベ、二首目の奥行のある構図がよい。



# 留 学

## 牧野 道子

はつ夏の青山墓地に迷ひつつ茂吉の墓へ辿りつきたり

太ぶとここに筆跡残されて「茂吉之墓」が夕闇に立つ

かの世にて如何にあらむか墓石には仲良く並ぶ茂吉、てる子が

ひたすらに学位を得んと欧州へ四十歳しちふを越へし茂吉の覚悟

厳寒のウイーンの業房げふぼう通ひづめ歌をわすれて医師なる茂吉

ひと月を遅れ茂吉が関東の大震災をミュンヘンに知る

一年で仕上げし論文目のまへに茂吉が思はず滲ます涙

留守の間の時をゆるゆる戻しつつ欧州めぐるてる子との旅

ふるさとを目前にせる茂吉らを打ちのめしたり 病院全焼

留学の夢を叶へし夫につき水無月なかば幼の手をひく

ボストンの短い夏の公園に繰り返し子の書くABC

## ひと言随想 留学

砂場には富士山残され夕暮れを振り返る子の手をひき帰る

日々浴びる英語のシャワー寝る前の子らに読みやる『ちいさいおうち』

幼日の記憶を手操りポストンへ三十路の吾子は再びを発つ

お帰りと笑顔に出迎へくれし夫安らかだつたと母の死を告ぐ

明宝研究会で「茂吉の海外詠」を調べる機会を頂いた。歌集は二冊『遠遊』と『遍歴』であるが、歌集としての評価はあまり高くないようだ。しかし留学の記録として残したと茂吉は言っている。また当時スペイン風邪に罹ったあと体調の不安もありながら、四十歳を越えた茂吉の欧州留学の厳しさが伝わってきた。I.Tの進んだ現代からは、想像も出来ない苦労があっただろう医師茂吉を思った。

ところで、もう半世紀も前、主人の米国留学に4歳2歳の子を連れて同行した。三年余り滞在したポストンで厳しい冬の寒さ、治安の悪さ、言葉の問題、宗教、人種問題など日本には学べない沢山のことが体験できた。異文化に接して、初めて見えてくるものがあり、そして大切にしたいと思ったのは日本語だ。国際化の進んだ今こそ、素晴らしい日本語を世界に発信してゆきたいものだ。

村野次郎への旅（127）

「ザムボア」と次郎（十九）

「ザムボア」（朱楽）第四卷第九號は大正七年（1918年）9月5日に発行された。編輯兼発行者河野愼吾、発行所紫烟草舎、定價一部金貳拾五銭であった。表紙、裏繪は前月号と異同はなく、総頁は36頁、他に広告が4頁付いている。

詠草欄の巻頭には村野次郎作品の八首、例月同じ頁にあった河野愼吾作品は、一頁あとの見開き四頁の上、下段に各七首、総計二十八首が出詠されている。

例によって次郎作品「塵埃風」八首から読んでいこう。

- ①ほこり風街路に立ちて夕づけど棚の花瓶はいまだぬくめり
- ②炎天の乾ける庭に動く蟻こらへかねたるころに見るも
- ③ほこり風ひねもす吹きて夕されば枇杷の梢

千々和久幸

もともしくは見ゆ  
④縁側にうつうつ目醒め足先のさ陸の花に蟲飛ぶを感ず

⑤電燈にあつまる蟲をあまた殺し今宵くやしきころに満てり

⑥こほろぎのこゑなほ聞こゆ明けのこる土間に冷めたく朝日はさすに

⑦明けのこる土藏のかげの土にゐて細々啼けるこほろぎのこゑ

⑧暗闇に星ひとつ見ゆ地行きてころ怪しくならんとするも（夏の夜）

一連の作品は先生が二十四歳の折のもの。それを読んでゐるわたしは八十歳を越えた。この年齢差と時代の感受性、風俗の違いはあろうが、今回の一連はわたしには解り辛いものが多かった。

①の歌、眼目は「ほこり風」という耳慣れ

ぬ複合名詞のもつイメージの喚起力にある。それはあるかなきかの細かな塵を立てる風、綿のような塵を含んでいる風。だがこれは背景に雰囲気として添えられているが、他の詩句にさほど働きかけては来ない。

下句の意は周辺は冷えを感じるようになったが、「棚の花瓶」は昼間の余熱でまだ暖かいというのだろうか。となれば秋冷の頃の光景だろうが、いまし先を読んでみよう。

②の歌、こちらは紛う方なき「炎天」である。下句の「こらへかねたるころ」は、③の「もともしくは見ゆ」、⑤の「くやしきころ」に、⑧の「こころ怪しく」と同じ掬い方である。

沈着冷静な描写を多く見て来た先生の作品からすれば、珍しく主観語が突出している。何か心境の変化があったのだろうか。

②の歌では、庭に動いている蟻が目障りなのだ。ふと目に留まった蟻に、これまで抑制していた気持（こころ）をかき乱されるからだ。しかし今は眼前の蟻を見ている以外に、こころを遣るすべがないのである。言葉が外側から宛がわれているから、内実が見え難い。

③の歌、こころ慰まぬ状態は続いている。

「ともしくは見ゆ」は「ともしく見ゆる」ではない。ワンクッション置いて、距離を持たせた把握になっている。だから直截な言葉を選けて「ともしく」と曖昧な表現になっている。ここでは「物事が満ち足りない状態である」（広辞苑）であろう。

作者には夕刻になつてもまだ満たされない思いが揺曳しているのである。具体は見せずその思いだけが光景に託されている。

時間の経過に作者の思いが託されているのだが、それが因果関係によつて結ばれている。さりながら結句の主観語は直截な意思表出にみえてその実、背景の後ろに隠れて力を失っている。このような迂回作戦が当時の先生の詠い口であった。

④の歌、歌のかたちは写生歌だが、そう一直線ではない。ここにも「うつうつ目醒め」といった、謎を含んだ詩句が挿入されているからである。この一連の流れからすると、二句の「うつうつ」は「うつらうつら」ではなく「鬱鬱」と読みたくなる。だが結句の「感ず」と呼応させて読めば、「うつらうつら」とも読めるであろう。

いずれにしろ作者は、この日の蟬りから距

離を置こうとしているのだ。そんな放心状態に蟲の飛ぶ影が映った、いやあれは本当に蟲だったか、という思いも引き摺ったまま。

⑤の歌、事柄に解らないところは無いが、ここでも読者は事柄の背後にある「くやしきころ」の内面には踏み込めない。蟲を殺すほどの激しい昂ぶりの原因について、作者が口を噤んでいるからである。

作者は事実を吐き出した自分を傍観している。傍観することで、辛うじてころの平衡を保っている。それ以上のものをころに容れる余裕は今はないのだ。

⑥の歌、この一首だけを一連から切り離して読めば、「先生懸命のデッサン」という趣の歌である。①から⑤までの歌に見たような謎や屈折のない、真つ正直な歌と言える。

恐らく一夜寝たことで「ともし」さや「くやしき」感情は、原状回復をしたのだろう。

周辺の光景もよく目に見え、こおろぎの声も聞こえるようになった。それだけに一首の道具立てが賑やかになっているが、これはころの伸び代と読みたい。

⑦の歌、⑥の歌をパラフレーズすればこうなるのだろう。その意味でこの歌は一連の屈

折のある歌とは切り離し、⑥⑦の二首セットで読むことも出来よう。

土蔵と言えば、先生の北多摩の実家が思い浮かぶ。草むらで鳴いているこおろぎではない、土蔵の陰の土で鳴いているというところにリアリティ（特異性）がある。それどころか心細く聞こえる。

その声を哀れがって聞いている先生はまだ床の中、今日の予定を思い巡らしつつ、ぼんやりこおろぎの声を聞いているという構図である。昨夜の葛藤は何であったのか、若者の目はもう以後の行動に向いている。

⑧の歌、一連の歌から離れたところで詠いだされているように見える。夏の夜の暗闇を歩いていたら「こころ怪しく」なったではあつても、「こころ妖しく」なって暗闇を歩いている、ではない。ロマンチックな青年の感傷とも、鬱勃たる覇気が「こころ怪しく」しているとも読める。

先生の冷静さ、世の中を先取りしたような老成願望（？）からは程遠い歌に見えるが、わたしには「怪し」を「妖し」と読みたい欲望に駆られる歌である。